

里七十里、或は百里にも餘る所を、纔に一日二日の間に、行付なり、此外津輕の外が濱邊蟹田蓬田邊よりも、今別三馬屋邊へ雪中には眞直に山を越えて、甚近くて行る、事なり、其餘一里二里五里七里の程ちかき所は、かくの如く雪の上を越て、近道となる所甚多し、常には皆雜樹或熊篠など生ひ茂りて、通ひがたき所なり、北地數十丈の雪積り、殊に嚴寒の國なれば、雪皆積るより氷て甚堅く、いかに踏とも落入るといふ事なし、南國の雪の様子とは、大に違ひたるものなり、寒中に彼地に遊ばざれば、信じがたき事なり、仙臺御先祖正宗の和歌に、中々につゝら下りなる道たえて雪に隣の近き山里、といへるも、兼ては解しがたく覺えしが、是等の見聞て初て此歌を感せり、〔北越雪譜初編上〕雪こま蟄こま、凡雪九月末より降はじめて、雪中に春を迎、正二の月は雪尙深し、三四の月に至りて、次第に解、五月にいたりて雪全く消て夏道となる、年の寒暖によりて迎りて速あり、四五月にいたれば、春の花ども一時にひらく、されば雪中に在る事凡八ヶ月、一年の間雪を看ざる事僅に四ヶ月なれども、全く雪中に蟄るは半年也、こゝを以て家居の造りはさら也、萬事雪を禦ぐを專とし、財を費力を盡す事紙筆に記しがたし、農家はことさら夏の初より秋の末までに、五穀をも收るゆゑ、雪中に稻を刈事あり、其忙き事の千辛萬苦、暖國の農業に比すれば百倍也、さればとて雪國に生る者は、幼稚より雪中に成長するゆゑ、夢中の蟲辛をしらざるがごとく、雪を雪ともおもはざるは、暖地の安居を味ざるゆゑ也、女はさら也、男も十人に七人は是也、玄かれども住ば都とて、繁花の江戸に奉公する事年ありて後、雪國の故郷に歸る者、これも又十人にして七人也、胡馬北風に嘶き、越鳥南枝に巢くふ故郷の忘がたきは、世界の人情也、さて雪中は廊下に江戸にい雪垂ゆきだりをかすたであみいたる下し雪吹をふせ窓も又これを用ふ、雪ふらざる時は卷て明をとる、雪下事盛なる時は、積る雪家を埋て、雪と屋上と均く平になり、明のとるべき處なく、晝も暗夜のごとく燈火を照して、家の内は夜晝をわかつたず、漸雪の止たる時、雪を堀て僅に小窓をひらき、明をひく時は、光